International MRA Association of Japan

IMAJ

NEWS NO.96

（社）国際MRA日本協会機関誌
発行年月日　2001年5月16日
発行所　（社）国際MRA日本協会
150-0022 東京都渋谷区恵比寿南3-7-5
東光苑マンション802
TEL:03-5721-6861 FAX:03-5724-6880
E--mail: LEB03055@nifty.ne.jp
発行人　相馬　雪香
編集人　長野　清志
頒　価　1部200円

『平和の創造者（クリエイターズ・オブ・ピース）会議』に参加して

開催期間：平成13年1月12日～20日
開催場所：インド、アジア・プラトーMRAセンター

マリアンネ 和田

航空機が成田空港の滑走路をゆっくりと離陸した瞬間、初めてのインドへの旅の期待と不安な気持ちが交錯しましたが、若い頃から常々インドへ一度は行ってみたいという長年にわたる希望が、日本とインドのMRAの方々の暖かいご支援によって実現されようとしていることに心より感謝と感動を感じました。この場を借りて、改めて心より感謝の意を表したいと思います。

今回の『平和の創造者（クリエイターズ・オブ・ピース）』の会議との出会いは、まず、日本サイドのコーディネーターとして、日本からの参加希望者を募り、参加者とともにインドへ同行してもらいたいという依頼が昨夏に来たことから始まりました。この会議の歴史には疎く早速リサーチをしました。この会議は、コー世界大会に出席されたタンザニアの女性政治家であるアナ・アブダラ・ムセクワさんが発案したもので、第一回はコーの世界大会の会議の一つとして1991年に350名の参加者を迎えて行われました。第二回は同じくコーで1994年に行われました。その後長いブランクがありましたが、第三回はインド、マハラシュトラ地方のパンチガーニにあるアジア・プラトーMRAセンター（創設から30年以上の歴史を持つMRAの会議場兼研修施設）で行われる事になりました。

今回は、日本からは長年会員としてMRAをサポートしてくださっている辰野ゆかりさんと、MRAの小田原国際会議やユース・グループに参加をしたことがあり、インドでNGOの活動について学ぶため既にインドに来ていた前田政史君と、私の三人が出席をすることになりました。

●閉会式で平和のろうそくを手にして

■主な内容■

◆『平和の創造者（クリエイターズ・オブ・ピース）会議』レポート・1-4P
◆CRT部会ニュース・4-5P
◆コラム『甘口・辛口』・6P
◆オーストラリアMRAスタディコース参加レポート・6-7P
◆MRAワールドニュース・8P
◆事務局便り・8P

ムンバイ（以前のボンベイ）空港では、夜中にもかかわらず空港近くに住むMRAのメンバーのご夫婦が出迎えてくださり、その方の自宅でその夜を過ごしましたが、翌朝再び空港まで送ってくれました。ムンバイからプネへの空の旅は短かったですが、ようやくインドへ来たという実感が湧いてきました。プネには、センターのバスの出迎えが来る予定でしたが、行き違いのためにうまく会えず、床に穴があき地面が見えているような古びたタクシーに乗って最後の旅路につきました。プネの街の電車の駅でタクシーに乗る際に、別のタクシーに乗っていた二人の会議参加者に出会いました。このお二人は遠路遥遥レバノンから来られたそうですが、大変疲れた様子で、一人の方の足に問題が生じているように見受けられました。とても不安そうにされていたので、「アジア・プラトーMRAセンターはプネから2時間半ほどです、後程会いましょう」と声をかけました。この出会いが、後に深い友情で結ばれるとは予期出来ませんでしたが、今思えば、神様が用意をして下さった瞬間だったと思えます。

『平和の創造者（クリエイターズ・オブ・ピース）』の会議には、19カ国から48名の女性と7名の男性が参加しました。九日間にわたる長い会議でしたが、レバノンの女性達との出会いから始まって、多くの素晴らしい出会いを体験することが出来たことに、深く感謝しています。会議はまず初日の1月12日（金）の夕食前に行われた開会式で始まりました。この開会式では、各国代表による挨拶、そして、この会議への抱負が語られた後、地元の小学生18名の平和の舞い（会議のオーガナイザーであり、更にプロのダンサーであるビジヤラクシミ・スブラマニアンさんによる振り付け）による歓迎がありました。日本を代表して辰野ゆかりさんが挨拶を述べ、前田君と私が、各国代表に続いてろうそくの塔に希望の火を灯しました。チベット代表のドルカー・ジャモ・キルティさんにより、第14世ダライラマ法皇からのこの会議に対するメッセージが代読されました。

また、パンチガーニ市長（女性）等も来賓として出席され、激励の言葉を下さいました。各国の代表者は、それぞれの民族衣装に身をまといました（私は浴衣を着ました）。小人数ではありましたが、皆この平和を構築するための会議へ大きな期待を抱きつつ世界各国から集まって来たことが感じられました。又、地元のとても貧しい家庭の子供たちが奇麗な民族衣装を身につけて（古くなった学校の制服を着ていた子供も二人ほどいましたが）嬉しそうに踊っている姿を見て、貧しさの中にも心の豊かさを感じ取ることが出来ました。開会式には、この小学生の家族も含めて、地元の市民たちも招かれていました。カースト制度の影響が未だ強く残っているインドの社会で、階級にこだわらず（憲法上では、インドに階級はあってはならないのですが）誰でも招待をしたオーガナイザーの心の大きさに感銘を受けました。

毎日のスケジュールは、まず早朝6時半のヨガの時間から始まりました。ヨガのマスターが招待され、毎朝30分ヨガの指導を受けました。その後お茶が出て7時半からはリフレクション、つまり「自分自身を鏡に映す」時間で、毎朝テーマに沿って自己の体験を分かち合った後に静かな時間を持ち、更に自分の思いを分かち合いました。日毎のテーマとしては、「平和とは？」「私は誰？」「インスピレーションを感じた時」「許し」「平和のビジョンを持って生きる」「思いやりの術」「多様な信仰」等がありました。それぞれのテーマに対し、別の人たちが自分の体験談を基に進行を務めました。

特にこの時間の中でのアフリカ大陸からの参加者の紛争や戦争における体験談が、今まで人事のように思っていたことをより身近に感じさせてくれました。苦しい体験をしている中から平和を求める姿を見て、日本は平和な国だからこそ何か助けてあげる事があるのではないかと思えました。

「思いやりの術」のテーマでのセッションは、私が進行を務めました。それまでこの会議では自分を検証することや隣人を愛するということを話し合ってきましたが、実際にこれらをどう行動に移したら良いのかということから話をしました。まず、自分自身の体験から話をしました。兄や母との関係が、私自身が変わったためにとても良くなったこと、又、都内のホームレスの人達に対して愛情と思いやりを表わすことにより、差別意識が消えていったことなどの体験を話しました。更に、思いやりは押し付けるものではなく、他の人のために物理的そして精神的に何かをやってあげることであったり、時にはやらないことが思いやりに繋がることもあると述べました。MRAの創始者・フランク・ブックマン博士が、「他の人の靴の底に穴があいていると知った時、その人の足の裏の冷たさをも感じ取るべき」とのアメリカインディアンの言葉の引用をよくされていましたが、これは他の人たちの気持ちに対して敏感になるようにということを表していると話しました。

長い静かな時間を取る際に、今まで思いやりを示すべき時にそうしなかったり、避けていたりしていなかったかどうかと参加者に省みてもらうようお願いしました。参加者の一人が、「息子が離婚をした後、親権を持つ嫁に気を使って孫に会っていないが、孫に会うための相談をする決心をした」と述べるなど、10人近くの参加者がそれぞれの決心を分かち合いました。最後にレバノンからの参加者が、アフリカの女性のコメントに対して、自分の体験を話してくれました。それは、ある人が自分に対して愛情と思いやりをもって接しようとしていたが、知らないうちに自分がそうさせないようにしていたということでした。その一言に、私自身も思い当たることがあり、自分がある人の愛情と思いやりを受け入れずに、その人に嫌われていると思い込んでいた自分を大きく反省した瞬間となりました。この会議ではこのように様々な気付きの瞬間があり、自分自身を振り返る良いチャンスを与えられました。

残りの会議のスケジュールとしては、朝食後にお茶を挟んで全体会議1と2がそれぞれ一時間ほど行われ、又、昼食の後はワークショップがありました。同時に、近くの村を訪問して村の人々と交流をしたり、近くの病院でボランティアをしたり、村の女性達をお茶に招いて交流会をしたりもしました。夕食後には、様々なイベントが企画され、会議の緊張感から解き放されてリラックスした楽しいひとときを過ごしました。又、4日間にわたって、ストーリー・サークルと呼ばれる8人から10人のグループで集まり（この同じグループがコミュニティー・グループとなり、食前食後の準備や片づけを共に行いました）、一人20分ほどで自分にとってもっとも意味深い転機となったことについて分かち合いました。夕方には瞑想の時間も設けられ、毎回各国の母国語で、様々な宗教の祈りを捧げる時間に当てられました。宗教は異なっていても、平和への祈りの内容は同じであり、言葉が分からなくともそこに何か宗教、人種、文化などあらゆる違いを超えた大きなものがあることを肌で感じ取ることが出来ました。その時まさに一人一人がピースメーカーとして重要な役割を持っており、私たちから平和の輪を広げて行くのだと強く感じました。

『平和の創造者（クリエイターズ・オブ・ピース）』はMRAから発信された組織としてオランダに本部を置くNGOです。現在この世界的ネットワークには300人以上が登録をしていて、その輪は広がりつつあります。日本においても、このような平和のネットワークがどんどん広がっていけばと思います。平和は一人一人の心の中から始まり、それが波紋のように広がっていくのですから。

会議に参加して決意したこと

辰野　ゆかり

何か探しているものが見つかりそうな気がして参加したインドでのワークショップでした。インドのMRA国際会議場、アジアプラトーはムンバイから電車で３時間、その上、車で３時間というロケーションだけに、つくづく選ばれた場所だと感じさせられました。

花咲き、鳥が歌う。早朝に、夜に、星が瞬く。まさに、平和を絵に描いたような天国。心がピュアになってゆく気さえしました。スケジュールを見ると、流石インド、朝の６時１５分からヨガ、瞑想タイムもあって、あと断食さえあれば・・・。

開会式では、色とりどりのサリーを着た子供達の踊りがあり、インドにいる事を感じさせてくれました。このワークショップにはケニア、ウガンダ、コンゴ等アフリカの国々、レバノン、エジプト、イスラエル等中近東の国々を中心にアジア、オーストラリア、欧米など１８ヶ国の人々が集まって、平和を創る人々、（クリエーターズ・オブ・ピース）と言うテーマで話し合う事になっていました。ここで、ふと、昔の事を想い出しました。丁度３５年前、１６才の私はMRAに出会ったのでした。小田原のMRAアジアセンターに色々な国の若者達が集まっていました。そして、どんな人と出会い、友達になるのかと、ワクワクしたのを覚えています。３５年も経って、同じ感覚が蘇ってきたのが、不思議でした。あの頃出会った友人達は、今でも私の大切な宝物です。このインドの地での出会いは、何を運んできてくれるのでしょうか。

（次ページに続く）

●各国からの参加者に誕生日を祝ってもらう辰野さん

インドは広いです。２人の若い女の子が、ナガランドから５日間電車に乗り続けて、ここパンチガーニ迄やって来ていました。独立したくても出来ないナガランド。インドでありながら、インドと異なる民族と文化を持っています。血の涙を流す目をデザインしたキャンペーンバッジをもらいました。「もう血を流さない」と言う文字が記されています。ナガランドのお母さん達の作った会だそうです。

インド以外の国々もそれぞれに紛争に因って傷を負っていました。また、人権に関する暗い過去を恥じ国を挙げて、謝罪の流れを作っている国もありました。私達日本人が如何に物を考えないで暮らしているか、思い知らされるという経験でした。

沢山の友達が出来、何ヶ国語ものバースデイソングで誕生日まで祝ってもらい、素晴らしい想い出となったと同時に、平和の中に生きて来られた事を、なんらかの形で世界に還元しなくてはならないと決意させられました。　今日から、動きださなくては。

▼▼CRT部会ニュース▲▲

企業行動（ＣＲＴ）部会主催講演会が開催される

去る４月13日（金）の午後１時半から５時半まで『企業評価の新しい基準―ステークホルダーと資本市場が決める新しい格付け基準―』のテーマで国際MRA日本協会・企業行動（ＣＲＴ）部会主催の講演会が経団連の後援を得て、経団連会館国際会議場にて開催されました。

水尾順一 駿河台大学教授の進行の下、小笠原敏晶（社）国際ＭＲＡ日本協会・ＣＲＴ部会長（ニフコ社長/ジャパンタイムズ会長）並びに金子尚志同ＣＲＴ副部会長（日本電気相談役）の挨拶に続き、星野進保 向社会性研究所代表（元経済企画事務次官）からは『これからの日本企業に期待するもの』、谷本寛治 一橋大学大学院商学研究科教授からは『“良き企業行動”の評価』、川北英隆 日本生命資金証券部長からは『投資家からみた“良き企業”』、岩田宜子 ジェイ・ユーラス・アイアール（株）日本企業担当マーケティング部長からは『外国人投資家による日本企業への議決権行使―システムの問題点と実態』、そして、大矢和子 資生堂お客さまセンター所長からは、『企業倫理活動に関するこれまでの取り組みについて』と企業評価の新しい基準というテーマに対し様々な角度からの講演がありました。130名余りの各企業からの参加者からは、「企業の在り方について考えさせられた」、「企業の社会的責任に対する関心が高まってきたことを実感した」等、企業倫理への関心の高まりを示す感想が寄せられました。特別ゲストとして羽田孜ＭＲＡ促進議員連盟会長、並びに、橋本徹富士銀行会長よりの挨拶もありました。又、主催者を代表し参加の御礼を述べた相馬雪香（社）国際ＭＲＡ日本協会会長の「日本が再び道を誤り、世界の流れから逸脱することのないよう、この会場におられるお一人おひとりに最善を尽くして戴きたい」という熱い訴えに感銘を受けたとのコメントも寄せられました。

●熱心に聞き入る参加者

●挨拶をされる羽田孜元首相

▼▼CRT部会ニュース▲▲

ロンドンでコー円卓会議（CRT）の運営委員会を開催

須田　康司　企業行動部会（CRT部会）事務局

去る３月９日～１０日にロンドンで開催されたコー円卓会議（CRT）の運営委員会であるGlobal Governing Board（GGB）会議に事務局として参加しましたので、会議の要旨を簡単に報告いたします。これは従来World Advisory Council（WAC）と呼ばれていたものが、昨年９月のシンガポール会議直後の運営委員会で改称が決定されたものです。

会議はロンドンの中心部ピカデリーサーカスにも程近いNaval & Military Clubという、退役軍人の為のクラブ施設を利用して行われました。施設内ではジャケットとネクタイを必ず着用せねばならない、いかにも英国的な雰囲気をもった施設でした。

出席者はGGBメンバーであるウィン・ウォーリンCRT会長（Mr. Win Wallin, Chairman CRT）、ドミニック・タランティーノ氏（Mr. Dominic Tarantino）、ハリー・ハロラン氏（Mr. Harry Halloran）、チャリト・クルバント氏（Ms. Charito Kruvant）（以上米国）、ネビル・クーパー氏（Mr. Neville Cooper）、アンドレ・レクラーク氏（Mr. Andre Leclerq）、ジャニック・ペーダーセン氏（Mr. Janick Pedersen）（以上欧州）、と日本からは、NECの金子相談役、科学技術財団の金子事務局長が参加されました。ジャパンタイムズの小笠原会長はご都合がつかず参加されませんでした。尚、GGBメンバーの他に米欧日の事務局に加えて、メキシコの窓口としての役割を果たしている方も参加されました。

主な討議事項についてご報告します。
まず、ウォーリン（Wallin）議長から「CRTの目的は『コー円卓会議・企業の行動指針』の普及・浸透と世界の貧困問題改善の為の現行システム（含金融システム）の改革への積極的関与の二つと考えているが、GGBメンバーがどう考えるか（CRTとして実行可能か）意見を交換したい。賛同が得られれば９月のCRT会議で、どのように具体的行動に移すかを討議することにしたい」との提案がありました。この提案について、日本のGGBメンバーから「貧困問題」は基本的には関係国政府・国連等の国際機関が関与すべき問題であり、CRTにフィットするよう具体的に絞り込まないと、あまりに広すぎて対応が難しいとの意見が出され、米欧のGGBメンバーからもこれを支持する発言が続きました。３時間強をかけての議論の結果、漠とした話にならないよう留意し、９月のロンドン会議で具体策を議論することとしました。

次にOversight Committee（議長はMs.Kruvant。日本代表委員は稲岡主幹事。）から、『コー円卓会議・企業の行動指針』の実施状況を企業自ら評価する為のベンチマークである、「CRT自己評価及び向上プロセス」（CRT Self Assessment & Improvement Process〔SAIP〕）が完成したとの報告がありました。更に、次のステップとして、カーギル（Cargill）社（世界最大の農産物・穀物商社）、スリーエム（3M）社、メデトロニック（Medtronics）社（ウォーリン氏が名誉会長）等の企業で実際に試してもらう段階に進めることが承認されました。

また、2001年の活動計画及び予算が討議されましたが、日本のCRT部会関係の行動目標は以下のとおりとなっています。

・「CRT・企業の行動指針」に基づく「自己評価及び向上プロセス」（SAIP）を経団連に紹介する。
・CRT部会としての新規メンバー５社の獲得。
・Global CRTへの資金貢献

最後にもう一つ重要な案件であるCRTの企業統治（Corporate Governance）に関する討議について触れておきます。つまり、昨年２月の米国フェニックスでのGGB会議で承認されたグローバルCRTとしての新たな組織構成（スイスに本部を設立し、CRTジャパンのような各国の組織は本部との契約を結んだ上でその下に位置付けられる。）を明文化した「統治に関する声明」（Governance Statement）が承認されました。

さて、今後は９月にロンドンで開催されるコー円卓会議・グローバルダイアローグに向けてプログラムを詰め、日本からの参加者を一人でも多く募って盛大且つ有意義な会議になるよう、準備万端整えて行くことになります。

◇◆◇ コラム『甘口・辛口』 ◇◆◇

社団法人 国際MRA日本協会会長　相馬雪香

― 話す二倍聴こう ―

小さい違いはあっても大方は間違いの無い天体の運行のお陰で日が一日一日長くなって行くことに感激しております。

ところで、つい最近のことですが、親切心で忠告をした相手が、私の言うことの一つ一つに「でもね、でもね」と反発して来ました。「一寸待って頂戴。こっちの言うこと聞いて下さいよ」と言った後に余計なことばがつい口をついて出てしまいました。電話の受話器をおいた時、心のどこからか声が聞こえて来ました。「耳が二つ、口は一つ、忘れたの？」そうでした。言うべき事は言うべきだけれど、ついつられて余計なことを言うことが何と多いのでしょう。

新聞を開いても、テレビの放送を聞いてもうんざりすることの多いこの頃です。自分に何も出来ないと思って、ついつい文句ばかり言ってしまいます。

一人ひとりの力は小さくとも集まれば新しいうねりを作ることも出来る。そうです。心の奥から聞こえてくるメッセージを大切にしようと思いました。

□□オーストラリアのＭＲＡスタディコースに参加して□□

久野　容子（青山学院大学４年生）

今年の初め、２００１年２月１日～１０日に開かれた「Life Matters」コースには、１６名の参加者に、多くのサポートメンバーを合わせて、３０名以上の年齢・国籍・文化的背景などの異なる人が深く関わりました。南アフリカ、ソマリア、ミャンマー（元ビルマ共和国）、ベトナム、マレーシア、中国、韓国、イギリス、アメリカ、オーストラリア、そして日本。その一人一人の想いには、新しいスタートをきるため、自己確認のため、何かを探すため、人生を考えるためと種々でした。私はと言えば、就職活動を目前に控えて、自分の将来の方向性を決めるにあたってのヒントを得たい事と、近い将来、日本でも何か若者向けのコースをしたいと考え、その情報収集・実体験のため遥々、オーストラリアまで行きました。

コースは、皆で作り上げるという考えの下、参加者とサポートメンバーが４つのグループに、各グループ８人前後振り分けられています。ちなみに、私はカンガルーグループで、このメンバーでコースを通して一緒に活動し、共同生活の一環としての配膳、片付け、食器洗いやディスカッションをします。いつも同じ顔ぶれで共同作業を行う事で次第に打ち解け、分かち合う事ができるのです。コース中は、全時間（朝８:００～夜９：００）に予定がびっしりつまっていて、毎日一つは大きなイベントがありました。主には、コの字型にセットした長机に参加者１６名が座り、多くの人の体験談や司会者の話を聞き、インプットをした上で、自分なりに考える時間が与えられ、後にグループにてアウトプットをする形式が中心でした。また、スポーツの時間も毎日午後に１時間設けられていました。

１日目は、夜６:３０に夕食を食べ、自分のグループメンバーを探す事から始まりました。

２日目は、「あなたの夢は？」「私達はどこから来るのか？」の二つのテーマに取り組みました。

３日目は、オーストラリアとアボリジニー（先住民）の歴史について講義を聴き、午後には、アボリジニーの高齢者福祉センターを訪問し、ここでは、ディジュルドゥーというアボリジニーの伝統的な楽器にチャレンジしました。

４日目は、「アイデンティティーとは？」「‘変る’とは？」のテーマについて体験談を聞くと共にディスカッションをし、夜は、歌のワークショップがありました。

５日目は、「争いを上手に解決する方法」について午前・午後と時間をかけて、取り組み、実際にコミュニティーで問題が発生したという状況を作り、グループごとに、それをどう解決するかと実践的なこともしました。

６日目は、「コミュニティー」について、「いかにコミュニティーを作るか？」という議題でした。この日の晩は、市内の福祉施設、約６箇所に、参加者１６名が別れて食事配膳のボランティア活動に行きました。

７日目は、「許す事」が午前中のテーマで、午後は、内ロッククライミングをしに出かけ、初めてでしたが、無事に登る事ができたので、また是非チャレンジしてみたいです。夜は、「Life Matters（人生は価値がある）」をテーマに参加者各自がコースを通して感じたことを自分のアイディアで表現する「クリエイティブ・ナイト」の発表の時間でした。私は、一番仲良くなった、韓国人の女の子（20才）と「和解」についてスキット（寸劇）をし大好評でした。文化や言語や伝統衣装の異なる両国ですが、近年、音楽やファッションのメディアを通した文化交流が盛んに行われ、また２００２年にはワールドカップが共催されるため、これからどんどん韓国と日本の距離が近づくといった内容の事を表現しました。

８日目は、「人生の価値・意味とは？」が中心のテーマで「友情・人間関係」についても皆で輪になって座り、意見を交わしました。夜は、市内に住むＭＲＡ関係者のお宅での夕食で、二人一組で各家庭でご馳走になりました。

９日目は、「目標、選択肢、そして決心とは？」「自分はどこへ行き、またどうやって辿り着くのか？」がテーマ。午後は、夜開催する「グローバルクラブ」（若者中心の活動、月に1回開催）の時間を借りて、約１００名を招待して「クリエイティブ・ナイト」の幾つかの舞台と、音楽のワークショップで練習した歌を披露しましたが、このとき、私と韓国人の人で「和解」のスキットをしました。見た人の心に二人の想いが届いた事を願いつつ、私自身にとってとても意味のあるものになりました。

１０日目の最終日は、朝食を食べ、閉会式・卒業式をしてコースが終了しました。

アーマーでの共同生活を通して、心の繋がった友人を作ることができ、世界各国との輪ができました。それと同時に、韓国との強い縁を感じました。コースに参加していた、韓国人の女の子との出会いは私に強く訴えるものでした。今まで、私は親友が在日韓国人であることから２度韓国へ行き、旅行者としての視点から韓国を知っていましたし、多くの韓国人の友人もいます。ですが、韓国にかかわりがあること、日本と韓国の関係について深く考えたことはありませんでした。
今回、オーストラリアという西洋文化の中で生活をして、アジア共通の感覚について度々気が付く事ができましたが、同時に、日本と韓国の近さにも驚きを覚えました。こういった気づきは、第3の視点で両国を見た結果かもしれません。しかし、共通する部分も多くある事実は変わりません。世界のために何かしたいと思いつづけてきた私ですが、世界のために何かする前に、日本と韓国の関係をより良いものにしたいと思うようになりました。そして今後、そのために貢献したいので、近い目標は、今すでに多く展開されている日本と韓国の交流キャンプですが、私自身もそのようなキャンプを企画し、少しでも多くの日本人・韓国人に両国の今を知って欲しいと思います。大きな事を書きましたが、私自身、両国について知らない事だらけなので、これからも勉強していくつもりです。

●アボリジニのコミュニティーセンターで、ディジュルドゥーに挑戦

●コースの中で、日本と韓国の和解をテーマにした寸劇を披露

MRAワールドニュース

世界のMRA—最近の動き

■アメリカ

MRAの新しい名称

去る3月4日から12日までアメリカのリッチモンドにてMRA国際連絡調整会議が、『変わりゆく世界の中でMRAの考え方の新しい体現方法と表現の仕方を考える』というテーマで開催されました。

MRAの名前を変えてはどうかという議論がMRAの世界チームでなされてきましたが、今回のこの会議での話し合いのテーマ中心の一つが、このMRAの新しい名称についてでした。

数日にわたるディスカッションの結果、"Initiatives of Change イニシアチブス・オブ・チェンジ"、"Change International チェンジ・インターナショナル"の二つの候補に絞られました。最終的な決定は今夏のコー世界大会中の8月6日～7日に再度開催される、国際連絡調整会議で行われることになっています。 どちらかの名称が採択された場合、今後、世界のMRAの新しい共通の名称として使われていくこととなりますが、国や地域によりMRAの名前を残したいという場合は、MRAと新名称を併記していくことも可能となります。(定款等、法律の摘要面では、MRAの名称を継続して用いることとなります。) コーでの話し合いの結果については、改めてご報告致します。

■台湾

MRA会議『自分から変わる』が開催される

『自分から変わる』をメインテーマとした第4回目のMRA会議が去る1月に台南市で開催され、250人が参加しました。両親に伴われて来た180人に及ぶ子供たちのためのプログラムも別に用意されました。
社会問題の多くは家庭の問題に由来し、多くの家庭の問題は個人の問題に帰するという考え方に基づき、今回の会議のテーマは"学び会う家族を目指して"となりました。

色々な夫妻が、お互いから学び合うことを通してそれぞれ成長し、また、変わり得た体験を話しました。「母親の父親に対する態度が変わったことが、自分の悪い習慣を克服する助けになった」と話す子供もいました。

会議は両親向けに開催されているMRAのコースに参加した人々により準備されました。現在、「より良い役割を果たすための親の訓練」、「EQによる個人の成長」、「心の声を聴く」、「自分の人生の再発見と再構築」、「なぜ変わる必要があるか」という5つのコースが開かれています。昨年は、100人の母親と10人の父親がコースに参加しました。

(前掲の記事はMRA World Bulletin 3月号の記事を抄訳したものです。)

MRA女性の会主催のバザーへの献品のお願い

先にご案内させて戴きました通り5月27日(日)のバザー開催日も迫って参りました。皆様方のいっそうのご協力をお待ちしております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。お問い合わせは、048-853-5054(国産工業、北口)まで。

事務局便り

◇第24回MRA小田原国際会議が、かねてご案内の通り6月8日(金)より10日(日)にかけてアジアセンターODAWARAにて開催されます。オーストラリア、スリランカ、マレーシア、フィリピン、台湾等の海外からのゲストに加え、5千人に及ぶ不登校児と共に歩んでこられた、師友塾塾長の大越俊夫先生のご講演(6/9)や企業行動(CRT)部会主催による『ビジネスを通して社会を変える』のシンポジウム(6/9)等様々なプログラムが用意されておりますので、是非、お越し下さい。 尚、海外からのゲストの渡航費、滞在費等への支援のための募金も行っております。ご協力を賜れば有難く存じます。

◇去る4月24日、沖縄での国際会議に出席されるため来日された、中国国際交流協会の何連生副総幹事他3名の方々と、昨年の10月にMRAグループとして同協会の招聘を受けたメンバーのうち、相馬雪香会長、榊たか子副会長、羽田綏子氏、伊藤智子氏、そして、事務局の長野がお会いし、旧交を温めることができました。今後の日中の交流を考える上で有意義となる率直な意見交換をすることができました。